日赤図書館雑誌　2006；13(1)：24-28

◆特集　雑誌のゆくえ◆

雑誌の行方　～トポグラフィー的観察～

山　田　　奨

抄録：情報知識の流通メディアとして、学術雑誌にも紙から電子への革新が進展している。雑誌論文の利用環境をトポグラフィー（地形図）的に眺めると、探して即欲しい場合には電子ジャーナルのインフラが利便性に優れる。印刷体の雑誌は相対的に役割を縮小させていこう。版元と最終利用者を仲介する図書館の役割も新たな次元に入りつつある。利用者便宜の本質に根差して電子と紙を最適に使い分ける環境をどのように築いていくのか、版元や流通ベンダーの挑戦と共に図書館サービスのノウハウにも変革が求められる。迎える姿勢ではなく向かう構えで関与していきたい。

Key words：雑誌、電子ジャーナル、利用環境、図書館、変革

Ⅰ．ノスタルジーと画期

ニューヨーク市マンハッタン区五番街の40～42丁目にあるニューヨーク公共図書館(NYPL：http://www.nypl.org/index.html)中央館は図書館の良き伝統を息づかせている。訪れる者に雰囲気の冥利を感応させ悟性を刺激する。ニューヨークを旅してここに足を運ぶなら絶好の宿がある。マディソン街41丁目ライブラリー・ホテル(http://www.libraryhotel.com/index.shtml)はガーデンテラスからNYPL中央館の正面を目前に望むことができる。図書館の仕事に携わる者の琴線に響く構えと拵えが妙味を醸している。

1996年、中央館から6ブロック南のエンパイアステートビル近くにオープンした分館、科学・産業・ビジネス研究図書館(SIBL：http://www.nypl.org/research/sibl/)は情報と知識の利用環境を革新している。インターネット時代の到来に呼応した進展を現し利用者の便宜向上を約束する。SIBLもライブラリー・ホテルからマディソン街をまっすぐ南に向かって歩いてくればよい。途中36丁目でモルガン・ライブラリー＆ミュージアム(http://www.morganlibrary.org/index.html)に立ち寄り歴史的なコレクションに接するのも一興。

図書館の使命と役割に絡んで変化の方向を捉えるには、先駆的先進的な模範を知ることが欠かせない。ニューヨークはその機会に満ちているが、出かけて往かれなくともインターネットの恩恵で常時バーチャルに垣間見られる。文明は図書館にもノスタルジーと画期を綯い交ぜにしながら進化するようだ。図書館資源の一角を占める雑誌の運用を考えるにもノスタルジックに及ぶ面と画期的な効用に至る面を地勢的(topographic)にそれらの起伏や形状と併せ見る鳥瞰が肝心に思われる。

Ⅱ．ジャーナル・インとジャーナル・アウト

雑誌を読む際に目配りして読む(ブラウジ

YAMADA Masashi
株式会社メテオインターゲート
yamada-ma@meteo-intergate.com

ング）場合と探して読む（スキャニング）時がある。前者は購読誌の最新号や最近号に向けられ、後者は範囲を広げ関心論文の掲載誌を特定する。予算との兼ね合いで購読誌を選定（ジャーナル・イン）し、非購読誌掲載文献の調達手段（ジャーナル・アウト）を備える方法が図書館に普通の景色として定着しているが、穏やかには見えない。予算制約下での料金値上がりや著作権問題などに煩わされ、絶え間なく風が騒いでいる。

紙に印刷された雑誌を読むスタイルは主流から離れつつある。同時に紙から紙へ複写する利用モードも遠ざかりつつある。情報知識の生産・流通・消費・再生産の過程が電子媒体で行われる世界が到来し、状況は加速度的に前進している。インターネットを電子情報の海になぞらえれば、その水先案内役 Google（http://www.google.co.jp/）は学術論文検索エンジン「Google Scholar」（http://scholar.google.com/）や書籍蔵書検索エンジン「Google Book Search」(http://books.google.com/）などであり、知識の岸辺に誘うさまざまな取り組みを始めている。書籍の購入では、オンライン書店の Amazon（http://www.amazon.co.jp/）が利用者の要望に即して試し閲覧できる<なか見！検索（Search Inside!）>で注文機会を増やす努力をしている。

電子書籍は電子辞書の分野で利用が先行しているものの技術的な試行に普及は鈍いが、学術雑誌に関して欧文誌の世界は電子ジャーナルの利便性が行き渡ってきている。需要側とりわけ図書館サイドからみた問題点の一端は電子ジャーナルの購読料が、年々値上がりするのもさることながら、年間の利用権を購うものであり、印刷体のように既購読分の自家所有が叶わないところにもあるようだ。しかしこうした問題意識は図書館サービスの本質とはズレていよう。図書館は冊子体雑誌のバックナンバー保管庫としてのみでは存在理由を失う。国立国会図書館を最後の拠り所に役立てる道も整備されつつある。製本雑誌を所蔵管理するコストも含めて雑誌資源の確保と運用に工夫と才覚が求められ、最新版を速やかに用意できる体制が予算計上で優先されよう。電子ジャーナルの登場と進展はジャーナル・インとジャーナル・アウトの利用環境にも従来的な枠組みを超えた新たな可能性をもたらしている。

Ⅲ．パレートとロングテール

欧文誌の利用環境向上は、予算措置次第で解決される傾向にあるが、学術利用等に配慮した料金面の特恵待遇をめぐる条件交渉は欠かせない。予算を十分確保できない場合の不便を、いかにして最小限に止めるかは、常に難儀な課題として立ち塞がるが、単独で取り組むのではなくコンソーシアムの知恵に倣って、予算規模の小さな大多数が集まり、需要全体に対し、相応の割合を占める仮想単一体のような枠組みの仕掛けが望まれよう。マーケティングで用いられる、商品全体の2割の売れ筋人気商品が売上全体の8割を占める「2：8の法則（パレートの法則）」はさまざまに適用されている。インターネット書店 Amazon は豊富な品揃えから少しずつ売れて全体の売上増に貢献する「ロングテール理論」（グラフの縦軸に売上、横軸に商品を取り売上順に並べると右下方に長い尾を引く形が描かれることから名付けられた）に注目している。インターネット・ショップでは、実店舗に商品をそろえ陳列する費用が発生しない。網羅的に商品が集められ、ワンストップで注文できる利便性が広まりつつある。新着雑誌に目を通し拾い読みするような場合を別にすれば、雑誌の利用モードもインターネッ

ト経由の電子ジャーナルが供する便宜にシフトしていくのが自然と考えられる。電子ジャーナルのサービス形態は欧文誌で先行しているが、納得しやすい価格水準と料金体系の設定、ライセンス課金法など対価モデルに対して改善の要望も少なくない。

Ⅳ．カレントとアーカイブ

最近の動向を伝える編集成果や関連情報に親しむには冊子体の方が好都合なので、雑誌の最近号を関心の向くまま読む習慣は失われなさそうに思われる。必要文献を過去に遡って、あまねく膨大な知的成果から求めるには電子図書館の利器に負うところが大きい。

必要に応じて特定の領域あるいは主題の論文・記事をピンポイントで読みたい場合には電子ジャーナルのアーカイブが威力を発揮し、専門分野のカレントな状況を編集意図に沿いながらフォローするには冊子体の小さなまとまりが向いている。雑誌コンテンツの利用形態は冊子体と電子媒体の両面価値を適宜使い分けながら重心を電子ジャーナルに移していくのが必然と考えられる。問題は日本の場合、電子ジャーナル化への取り組みが期待に反してスピードを伴わない事態にあろう。根本的には発行元の判断と意欲と才覚に帰するが、アーカイブに集成する次元で発行元と契約しサービスの提供を進める取り組みが以下のようにいくつか現れている。

○J-STAGE<独立行政法人科学技術振興機構（JST）>
（科学技術情報発信・流通総合システム
http://www.jstage.jst.go.jp/browse/-char/ja
○Journal@rchive<独立行政法人科学技術振興機構(JST)>http://www.journalarchive.jst.go.jp/japanese/top_ja.php
○CiNii<国立情報学研究所（NII）>
（NII 論文情報ナビゲータ）
http://ci.nii.ac.jp/cinii/servlet/CiNiiTop#
○NII-REO<国立情報学研究所（NII）>
（NII 電子ジャーナルリポジトリ）
http://reo.nii.ac.jp/journal/HtmlIndicate/html/index.html
○ELBIS<大学病院医療情報ネットワーク（UMIN）>
（UMIN 医療・生物学系電子図書館）
http://endai.umin.ac.jp/endai/fulltext/
○メディカルオンライン<株式会社メテオインターゲート>
http://www.meteo-intergate.com/
○PierOnline<株式会社サンメディア>
https://www.pier-online.jp/index.php

それぞれのサービスについて特徴を詳しく紹介する余裕はないが、いずれも課題解決途上にあり、実際の利用に当たって便利―不便、都合―不都合、具合―不具合　勝手―不勝手、等々のフィードバックを反映した不断の改善進歩が望まれる。俯瞰的に見れば、<J-STAGE><GiNii><ELBIS>は国内学協会系のジャーナルを対象に論文記事の全文公開ルールには限定条件が含まれる。また必要資金に税金が手当てされる経費構造から重複分散投資の不合理も垣間見える。<Journal@rchive>は<J-STAGE>から派生した一般無料公開（著作権法で認められた私的利用の範囲内）のサービスとして歓迎されるが収録範囲（誌数と期間）に制約される。

<メディカルオンライン>は国内の医歯薬系学協会誌と商業誌を併せて扱う有料サービスでワンストップの利便性追求に挑み、<Pier Online>は医歯薬系商業誌の冊子体最新号以外を電子ジャーナルとして配信（ホスティング）するサービスを始めている。

<NII-REO>はリポジトリ・サービスとし

て外国学術誌の商用電子アーカイブを大学図書館のコンソーシアムと共同導入（価格交渉を共同で行い、利用ライセンスを個別契約）して供用しており、ジャーナル・アウトの新たなモデルを築いている。大学図書館では研究成果の学術情報を雑誌掲載論文も含め電子的媒体で組織化し発信する機関リポジトリの構築・運用も推進されており、HUSCAPはベンチマークのひとつとして注目される。

HUSCAP<北海道大学付属図書館>
（北海道大学学術成果コレクション）
http://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/index.jsp

V．無料と有料

学術雑誌の購読料高騰を背景にオープン・アクセス（学術文献のオンライン無料閲覧）の環境作りも進められている。学術コミュニティは本来知的所産を共有する互恵原則の世界である。知的成果の発信者（著者）は同時に他の知的成果の受信者（読者）であり、この相互作用により学術文化が進展する。直接的な費用の負担に煩わされず常時自由に利用できる学術情報環境が理想に描かれる。学術情報の流通に商業出版活動が寄与する局面を正当に評価するにしても、応益の対価水準が適正な情報流通を妨げる傾向があるということは否定できない。

直接の費用負担を伴わないことが完全な無償と満足を意味してはいない。学術情報の供給と需要に必要な支出を賄う仕組みがどこかで働いている。当面無料なのは勿論大歓迎だが、それを担保する情報環境基盤の財政的トポグラフィーを理解していたい。

代価に関連して著作権使用料の負担回避に拘る向きがある。著作権保護は当然だが許諾をめぐり厄介な問題に悩まされる。雑誌掲載の論文・記事単位で利用する場合に著作権料が料率ではなく実額で設定されると、価格に弾力性が失われる。単純な例でみると、著者に支払われる著作物の印税料率は一般的に10％程度であり、定価1000円の本で100円の印税になる。文庫版で値段が500円に下がれば印税も50円に下がる。しかし印税を実額制にした場合、文庫版の印税率は20％になり低価格出版の採算を困難にする。

代価に対する利用者の要求は、妥当な水準に収まっていることであり、著作権料が含まれて法外な値段を払わせられることには納得がいかない。著作権料課金回避が本質的な問題なのではなく、適正な価格形成を歪めるような著作権使用料金に対して、許容しがたい心理が押し寄せる。著作権料は薄く込められ広く行き渡り厚く報われるのが基本と心得たい。電子ジャーナルの普及とその利用環境の進展は著作権料の収入モデルにもロングテール理論が及ぶ可能性を期待させる。

VI．アカデミックとパブリック

大学は学術コミュニティの拠点として情報知識基盤を発展させているが、象牙の塔からの脱皮も志向しつつある。<NII-REO>は論文標題と抄録の検索・閲覧を一般利用者にも開放（一部は本文閲覧も可能）しており、本文を閲覧したい場合はライセンス契約した大学図書館に赴いて用を足せる。<HUSCAP>はインターネット等で著作物を公開利用する国際的な取り組みである。

creative commons（http://www.creativecommons.jp/）への対応を含めて誰でも自由に利用できる。

<Journal@rchive>も公共財として無料閲覧に供されており、湯川秀樹博士や朝永振一郎博士のノーベル賞受賞論文なども含まれている。

PubMed（http://www.ncbi.nlm.nih.gov/

entrez/query.fcgi?DB=pubmed）の理念に追随して学術的成果の蓄積をパブリックに広めるチャネルが増しつつあり、日本でも情報知識のユビキタス（常時遍在）な利用環境を指向するインターネットの潮流に乗って電子ジャーナル整備のベクトルが促されていこう。

Ⅶ. 画期とビジョン

インターネットのWeb世界は進化を加速させており、世の中のさまざまな局面で新たな利便性の萌芽を現している。情報知識の利用環境も必然的に変容、高度化していくが、作り出される状況に流されるのではなく、望ましい状況をビジョンに描き主体的に関っていくことが求められる。たとえば、電子カルテから電子ジャーナルの該当論文にハイパーリンクする可能性など、ネットワーク上のコンテンツを複合的に利用できる次世代の[Web 2.0]に倣い［電子ジャーナル2.0］の新潮流を洞察する営みが欠かせない。

電子ジャーナルの時代を待ち受けるのではなく共に向かって行く気概を養いたい。